

近畿文化会との思い出

猪 熊 兼 勝

私にとって近畿文化会との関わりは、父・兼繁と二代にわたります。近畿文化会が設立される以前からの経緯を記します。

昭和八年（一九三三）、「滝川事件」が起こりました。当時、京都帝国大学（現、京都大学）の滝川幸辰教授が危険思想の人物とみなされ、『刑法読本』『刑法講義』が鳩山一郎文部大臣により発禁となり、また文部省は京都帝国大学の意向を無視して滝川教授を休職としました。この処分抗議して法学部の全教授が辞表を提出し、それに連座した父は無職となり、奈良県と大阪電気軌道（以下、「大軌」と記す）の嘱託職員になりました。嘱託となった



父 猪熊兼繁

には猪熊家の事情がありました。祖父・浅麻呂は有職故實の研究者で、昭和一四年（一九三九）香久山で太占の再現などを行っています。正規の職員では、祖父の関わる祭事や年中行事を手伝うことは無理でした。

一方、吉野郡白銀村（現、五條市西吉野町）出身の田村吉永氏は大和郡山に転居し、昭和六年（一九三一）に歴史研究会の「大和國史會」を設立し、昭和九年（一九三四）一〇月に研究紀要の月刊『大和志』を発行します。この創刊号には、建築史家で法隆寺非再建論者の足立康博士、のちに薬師寺管主となる橋本凝胤師、『大和の伝説』など奈良関係の著作が多数ある郷土史家の高田十郎氏の名があります。

大和國史會の初代会長には、この活動を支援した吉野の資産家である阪本猷氏が就任しました。阪本氏は吉野鉄道（現、近鉄吉野線）の社長でしたが、昭和四年（一九二九）に大軌と合併すると、吉野線の営業所長になりました。父は、大軌創業三〇周年（一九四〇年）を記念した文化映画の制作に関わります。内容は「一、飛鳥より奈良へ」

「二、天平の文化」の二編が奈良の史跡風景、「三、古き都の傍」が奈良時代から室町時代までの風俗実演、「四、吉野」が史跡実写で、総合タイトルを「大和」としました。続いて東大寺、西ノ京（薬師寺・唐招提寺）、春日大社・興福寺の三編が制作され、全部で四時間の大作だったようですが、これらは現存しません。



飛鳥の車石をみる田村吉永先生
（一番左端の人物）

昭和一六年（一九四一）、大軌は子会社の参宮急行電鉄と合併して関西急行鉄道（以下、「関急」と記す）となりました。その時期、関急社内の編纂室にあった近畿観光会では、社寺等の案内書『大和路』（全二冊）を出しています。父も『春日社 興福寺』『室生山』『飛鳥めぐり』の三冊を書きました。

昭和一七年（一九四二）、関急の監査役であった阪本会長が逝去すると、大和國史會の会長には関急の金森乾次専務が、また顧問の一人には、沿線の社寺や文化財に関心があり大和文華館設立の構想をもっていた、関急の種田虎雄社長が就任しました。大和國史會の趣旨に賛同し、戦前から協力・援助していたのです。その後、戦争が激化して『大和志』は昭和一九年（一九四四）六月に廃刊となりましたが、見学会は同年一月まで開催されました。この頃、関西の私鉄は国策で合併す

ることとなり、関急は南海鉄道と昭和一九年に合併して近畿日本鉄道（以下、「近鉄」と記す）となりましたが、昭和二年（一九四七）に近鉄と南海電気鉄道に分かれました。

その後、近鉄は田村氏を嘱託研究者に迎え、昭和四年（一九四九）、大和國史會を母体にして別の会なども統合し、社内に「近畿文化会」を設立します。会員に送付する『近畿文化通信』（のちの『近畿文化』）の執筆には、近鉄の嘱託研究者である中村直勝先生、北島葭江先生、川勝政太郎先生など錚々たるお名前があり、現地見学会（臨地講座）も再開されました。また、主に学生を対象にした考古学講座なども開催しており、のちに樞原考古学研究所の初代所長となる末永雅雄先生が講師をされています。

このような歴史を経て、近畿文化会は前身の大和國史會から数えると九一年、近畿文化会としては七三年となります。まさに我が国における史跡見学



「古代の奈良」のパフレット
(写真の女性は丹羽真理子)

講座の草分けといえます。

一方、昭和二二年、父は京都大学法学部教授となりました。そして、昭和三一年（一九五六）五月の臨地講座「薬師寺 唐招提寺見学会」では、田村先生・川勝先生とともに、講師として講演を行いました。

昭和三五年（一九六〇）、近鉄は創業五〇周年を迎え、佐伯勇社長の企画で、父は再び記念映画「古代の奈良」を制作しました。このとき私は学生でしたが、お願いして一年間、市川昆監督の師匠である石田民三監督に映画製作を教えていただきました。撮影では、石舞台古墳を黒シートで覆ったり、夜中に大仏殿の格子窓からライトをあて、大仏様のお顔を浮き上がらせたりしました。さらに記念事業の一つとして、沿線の古文化顕揚のために『近畿日本叢書』（全一〇巻）を刊行し、父も『室生寺』のなかで「室生の竜穴」を執筆しました。

また、父は近鉄が制作を依頼した上

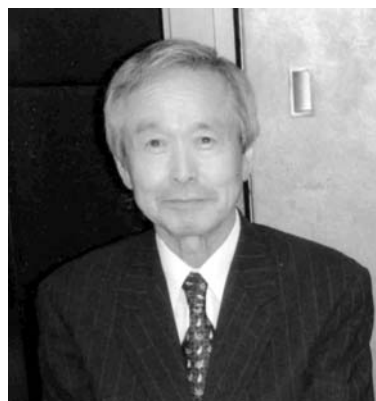
村松篁画伯の大作「万葉の春」（現在は奈良市登美ヶ丘の松伯美術館に寄託）の考証にも携わりました。奈良にふさわしい天平時代の春日野の風景を描いており、松篁画伯の代表的な人物画です。私は大学院修了後、奈良国立文化財研究所（現、奈良文化財研究所）に就職し、平城宮跡の発掘に従事しました。昭和四一年（一九六六）、奈良県が藤原宮跡の調査をするにあたり、そのお手伝いに行くことになりました。この調査では、近畿文化会の常連講師で現在は奈良県立橿原考古学研究所研究顧問の泉森皎氏と一緒にしました。昭和四三年（一九六八）に大成果をあげ、翌年から私たちの職場が奈良県から藤原宮跡の調査を引き継ぐことになりました。

一〇年後、私が奈良国立文化財研究所付属の飛鳥資料館に異動した際、近畿文化会担当の村上泰昭氏から臨地講座講師のお誘いを受けました。これには事情がありました。昭和三八年（一九六三）、近鉄西大寺車庫の移転予定地が平城宮西南隅に掛かっていたため保存運動が起り、以来、お互いが感情的にも気まずくなり、奈良国立文化財研究所の所員は近畿文化会の講師にはなっていないでした。ですが、私だけは近鉄と深いご縁がありました。

最初の臨地講座は昭和五五年（一九八〇）の「南山城の古墳と寺―高麗寺と椿井大塚山古墳―」（『近畿文化』373号）で、古墳時代の幕開けともいえる椿井大塚山古墳などを見学しました。古墳研究で有名な小林行雄先生（京都大学名誉教授）の『古墳時代の研究』（青木書店）は難解で、京都からの通勤電車内で開くとすぐ居眠りをしました。のちに私はこの古墳の整備委員会委員長をしました。

その後、飛鳥を中心に研究の成果を臨地講座で披露しました。また、近鉄提供のテレビ番組「真珠の小箱」でも、ときどき飛鳥について語りました。当時、私は飛鳥の石造物については自他ともに認める「研究の第一人者」と自称していました。何故なら、当時、これらの奇怪な石は研究の対象外になっていて、小説家の松本清張氏以外は誰も見向きもせず、研究していたのは一人だけだったのです。

臨地講座では、ときには話題を変え、飛鳥以外の見学地にも行きました。そのなかで今も印象に残る講座があります。一つは平成一六年（二〇〇四）の「京都寺町界隈を歩く」（『近畿文化』659号）で、子どもの頃からの遊び場である京都の寺町通を歩きました。寺町通は秀吉が都市計画で整備した面影が残る一方、幕末から明治にかけて発展したので繁華街となっていました。観光客が多い土曜日の京都でしたが、段



筆者

取りよく動くことができました。もう一つは平成二二年（二〇〇九）から二三年にかけて実施した、近鉄沿線が主な舞台となる、古代史上最大の内乱をテーマとした「壬申の乱を走る」（『近畿文化』715・724・731・736・744号）です。当初は二回の予定でしたが、五回になってしまいました。苦勞しましたが、大変好評でした。近畿文化会担当の武部宏明氏とはこのような講座も企画して楽しみました。

現在、各地で史跡の見学会が開かれています。私の経験からみて、近畿文化会ほど完璧な準備で運営されている講座はありません。実施の三ヶ月前には講師への依頼があり、綿密な下見をしたうえで、講座の参考となる『近畿文化』を発行、当日の臨地講座では参加者の安全を考えた用意周到な引率がなされます。さすが鉄道会社主催の講座だと思えます。近畿文化会の皆さん、お世話になりました。父の分も。

（京都橘大学名誉教授）

近畿文化会には長い歴史がありますが、過去の経緯は今では忘れ去られようとしています。今回、猪熊兼勝先生にお願いして「近畿文化会との思い出」を執筆いただきました。

近畿文化会からのお知らせ

新型コロナウイルスへの対応について
今後の感染状況により、マスク着用などの感染防止対策を見直しますが、引き続き臨地講座等の行程・定員の変更や中止・延期事務局の休止等を行う場合があります。

臨地講座等の掲載・受付開始日について
今月号より、翌々月(今月は9月)に実施の臨地講座等を掲載し、実施月の前々月(9月実施は7月)から受付を開始します(入門臨地講座など一部を除く)。

各講座毎に指定していた参加費用・代金の「振込期間」を撤廃します。
後から講座開催日の1週間前までにお振込みください(入門臨地講座など一部を除く)。

受付中の臨地講座等のご案内

7月3日(日)春日大社と社家住宅「藤間家」集合
春日大社「感謝 共生の館」10時/講師 春日大社権禰宜中野和正/費用 会員四、〇〇〇円 一般五、〇〇〇円は満員になりました。

7月9日(土)高野山奥之院を歩く「集合 南海りんかんバス「奥の院口」バス停留所 12時35分/講師 大阪大学教授 狭川真一/費用 会員三、二〇〇円 一般四、二〇〇円は好評受付中。

高松塚古墳壁画発見五〇周年 特別講演会開催日

8月21日(日) (事前申込制)
第1部 飛鳥京跡池からみる古代庭園の継承と変革 講師 奈良大学准教授 相原 嘉之
時間 10時受付開始(12時20分頃終了予定)
第2部 持統天皇の願いを映す飛鳥の王墓群 講師 関西大学非常勤講師 今尾 文昭
時間 13時20分受付開始(15時40分頃終了予定)
定員 各部 90名(前納、荒天中止)
費用 各部 会員一、五〇〇円 一般二、〇〇〇円
会場 大和文華館講堂(近鉄学園前駅より徒歩約7分)
※詳細は先月同封のチラシをご参照ください。

7月13日(水)から受付を開始する講座

9月6日(火)京都大学キャンパス見学会
講師 京都華頂大学教授 川島 智生
集合 京都大学時計台記念館前 13時30分
見学場所(いずれも外観)時計台記念館、陳列館、土木工学教室、建築学教室、旧光華寮、東アジア人文情報学研究室

9月9日(土)いにしへの姫皇子たちの夢の跡「幻宮齋宮めぐり」
講師 斎宮歴史博物館学芸員 榎村 寛之
集合 近鉄JR松阪駅近鉄改札口 10時10分
行程(三重交通の貸切大型観光バス利用、徒歩4km)
消は一、〇〇〇円(講座開催費)を負担。

近鉄・JR松阪駅 齋宮歴史博物館(以下、明和町) さいくう平安の杜: 竹神社: いつきのみや歴史体験館

「昼食」業平松 隆子女王墓 近鉄・JR松阪駅「16時35分頃解散予定」
定員 20名事前申込制、前納、荒天中止
代金 会員六、八〇〇円 一般七、八〇〇円
その他 遅めの昼食となり「イオンモール明和」で各自自由昼食です。

9月23日(金・祝)葛城山麓の大型古墳と群集墳
講師 天理参考館特別顧問 松田 真一
集合 近鉄御所線新庄駅 9時20分
行程(徒歩10分)近鉄新庄駅: 屋敷山古墳(以下、葛城市): 神明神社古墳「石室見学」: 二塚古墳「石室見学」: 団子山古墳: 「昼食」: 寺口忍海古墳群(葛城山麓公園): 葛城坐火雷神社: 地光寺跡: 脇田遺跡: 葛城市歴史博物館

16時45分頃現地解散予定
定員 40名事前申込制、前納、荒天中止、健脚向
費用 会員三、四〇〇円 一般四、四〇〇円
その他 ①弁当持参。葛城山麓公園で昼食です。②解散場所から近鉄忍海駅までは徒歩約3分です。③9月21日(水)以降の取消は一、〇〇〇円(講座開催費)を負担。

今後の講座予定 ※一部次号発表後に受付
10月8日(土) 入門講座 宇治等院のみほとけたち
講師 帝塚山大学名誉教授 関根 俊一
10月15日(土) 臨地講座 木津城陽の御仏めぐり
講師 帝塚山大学考古学特別研究 戸花 亜利州

10月22日(土) 臨地講座 京都の巨大仏堂めぐり
講師 大阪電気通信大学教授 矢ヶ崎 善太郎
10月29日(土) 臨地講座 寝の森と藤原の宮
講師 奈良芸術短期大学特任教授 前園 実知雄

講座のお申込および受付後のお取消
電話 〇六一六七五―三六八六
時間 9時10分~18時(土・日・祝日は休み)
FAX 〇六一六七五―三六六九
Eメール kinbun@w.kinetsu.co.jp
※FAX、Eメールは受付開始日の9時10分以降24時間受付可能です。(4営業日前以降は電話のみ受付)

講座の参加費用・代金は、受付完了後から講座開催日の1週間前までに、講座日・講座名・会員番号・住所・氏名・ふりがな・電話番号を明記の上、郵便局備付の払込取扱票を使用して、郵便振替口座「〇〇九六〇―二一三〇四一四三」近畿文化会へお振込みください。

※正式加入者名は「近鉄グループホールディングス株式会社 近畿文化会」です。
旅行業務扱いの臨地講座(☆印)には4月同封の旅行業約款を適用し、お取消(キャンセル)の取扱いは講座案内に同封する旅行条件書によります。

大阪府知事登録旅行業第2-173号(社)全国旅行業協会正会員
近鉄グループホールディングス株式会社大阪市天王寺区上本町1-1-155

近畿文化会ホームページ

https://www.kinetsu-jhd.co.jp/culture/honka/
検索サイトに「近畿文化会」を入力、または下記QRコードを読み込んでください。



※掲載内容は6月23日(水)時点のものです。

近鉄グループホールディングス(株) 近畿文化会(年会費二、二〇〇円(家族会員一、二〇〇円) 郵便振替口座 〇〇九六〇―二一三〇四一四三 近畿文化会)
【会員特典】毎月『近畿文化』郵送(本会員のみに)。臨地講座(費用・代金別途)に会員価格で参加可能。
【お問合せ】〇六一六七五―一三六八六